高津第一地区

社協ニュース

第50号 記念

発行日　平成28年10月1日
発行人　高津第一地区社会福祉協議会
会長　川　辺　清　三
高津区溝口1-6-10　てくのかわさき3F
TEL 044-812-1879 FAX 044-812-3549

秋の二ケ領用水

安心して暮らし続けられる高津区を

高津区長　山田　祥司

このたび、高津第一地区社協ニュースが第50号の節目を迎えられましたことに、心からお祝い申し上げます。また皆様には常日頃、区政へのご協力、そして会食会や夏休み子どものつどい等の地域福祉活動の推進にご尽力いただき、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

さて、高齢化、核家族化、プライバシーに対する過剰意識等から、近所付き合いをはじめとした地域の繋がりが弱くなっています。そのような中、高齢者が閉じこもりがちになって孤独感や疎外感を抱いたり、子育て家庭が育児不安や育児ストレスを一人で抱えてしまったりといった問題が起こっています。

このような状況において、助け合いや繋がりを強めるためには、身近なふれあいの場、話し合いの場が必要です。そこに行けば興味を覚えることがある、何気ない話ができる人がいるというような、楽しくて、また行きたいと思える集いの場が日頃の生活範囲内に沢山あることが大切です。そしてそのような場で、年代や障害のあるなしを超えた、交流や相談し合える関係づくりができれば素晴らしいと思います。

高津区役所では、区民の皆様が住み慣れた地域で安心して暮らし続けることができるよう、保健福祉センターの中に「地域みまもり支援センター」を設置し、地区担当保健師が積極的に地域に出向き、地域で心配な方の支援や、つながりと支えあいの自主的な地域づくり活動のお手伝いをすることとしております。

しかし、地域福祉の推進は、何といっても社会福祉協議会が中核となります。地域での課題を見つけ出し、皆で共有し、解決するための取組を進めるなど、地区社会福祉協議会の皆様方が担っておられる地域福祉活動に対する期待は、益々高まっております。

今後とも何かとご苦労をおかけすることになるかと存じますが、行政もしっかり連携を取らせていただきますので、地域福祉推進の中心となってご活躍いただきますよう、心からお願い申し上げます。

創刊50号特別企画

地域の福祉活動を担い続けて

高津第一地区社会福祉協議会は、地域福祉の第一線で活動し続けて25年。本誌は、年2回、地域の皆さんに活動と情報を伝え続けて50号の発刊を迎えた。

少子・高齢化が進行する社会と共に交通と生活環境の利便性から人口増加が進む高津第一地区。この複雑に変貌する地域社会の中で、求められる福祉活動を担い続けた方々に、その思い出と今後の課題について寄稿していただきました。

社協ニュース創刊号

地域福祉の課題

会長　川辺 清三

最近のニュースで、国民の4人に一人は65歳以上の年齢構成になったと伝えられましたが、2025年には、いわゆる戦後生まれの団塊の世代が75歳以上の年齢になることから、少子化とともに高齢化の急速な進展により、介護・医療費等の社会保障費の急増が懸念されています。

このような社会情勢の中で、孤独死・老老介護・介護疲れによる自殺など、痛ましい報道がたびたびなされています。地域に密着した地域福祉事業に取り組んでいる私たちにとっても、高齢化社会に向けた今後の対応、取り組みについて、難しい課題が投げかけられています。

高齢者の生活支援を手助けするためにも、地域の要である町会、自治会との連携を密にし、協働して地域での支え合い、見守り活動の推進や、社会福祉活動等に理解と関心ある人材の発掘、啓発が必要であると思っています。

その一つのツールとして「社協ニュース」は大事な役割を担っているのではないのでしょうか。

保護司からの地域福祉

副会長　赤津 武雄

私は、保護司を拝命して35年になります。保護司は、まず社会福祉協議会に参加することになります。そして、民生委員の方々と研修するようになります。保護司の活動は、間違って罪を犯した人々の更生を手助けすることです。仮出所し、保護観察付に判決が下った後、更生の手助けをする要請がまいります。

犯罪の内容も変化してきております。暴走族、シンナー吸引、窃盗、そして最近はIT関連犯罪、薬物（危険ドラッグ）犯罪などです。

犯罪に戻らない、戻させない、立ち直りをみんなが支える明るい社会を作ることです。これは、犯罪や非行をした人が、罪を償って地域に戻ってきた時、その人たちを排除し孤立させるのではなく、責任ある社会の一員として再び受け入れることが自然にできる社会環境を構築し、明るい社会を創り上げようと言う事です。

うるおいと活力があふれる地域に

副会長　小竹 正美

会社を引退して地域に戻り、ふとしたきっかけから町会活動を行なうようになりました。その延長線で社会福祉協議会の仕事にかかわって3～4年になります。現役のころは失礼ながらほとんど無関心であった社協活動が、いかに多くの人たちの長きにわたる努力で支えられてきたか、よく分かりました。第一社協の機関紙のバックナンバーを読み、あらためて先輩の皆さんのご苦労の足取りを知った次第です。

私たちの国は2025年には、団塊世代の全員が、後期高齢者になります。少子高齢社会の福祉活動はこれまでとはまったく違った発想と行動が求められると思います。それは①地域に昔からあった「向こう三軒両隣の助け合い」による共助や互助がより強く求められる。②福祉サービスを行なう人と受ける人の境界がなくなる。つまり年齢や性別に関係なく自分が出来ることで人の役に立つことを意識する、ことだろうと思います。

少子高齢化をプラスイメージでとらえて、成熟社会のうるおいと活力があふれるようみんなで協力し合いたいものです。

福祉活動の思い出

前会長　渕原 勇

社協ニュース50号おめでとうございます。在任中は皆様方には大変お世話になり有難うございました。

社協の活動の中で、平成12年頃より足掛け4年ぐらいでしたか、溝口の「森の湯」さんのご協力により、「公衆浴場活用型ふれあい事業」がありました。私の担当での参加者は4名ほどおり、会場が遠いとのことで、「森の湯」さんに送り迎えしました。担当役員さん数名が待機し、介護士さんにより、その日の健康状態で入浴できなくなり、残念がられた時もありましたが、皆さんにとても喜んでもらったことを思い出します。

また、平成13年の「秋の歩こう会」では、世田谷の「等々力渓谷」に行くことになりました。等々力駅に集合して20分ぐらい歩道を歩き、緑豊かな渓谷の階段を下り広場に出ました。広場で、役員さんが用意してくれたシートの上で車座になってお弁当を美味しく頂きました。その後、しばらくの間、曲がりくねった遊歩道を皆元気に散策。最後に急な階段を上ると、静かな街並みが見え、皆さんの笑顔が印象的でした。

昨今、「自分の健康は自分で守る」の合言葉に、進んで自己管理をしている方が多くなっています。寝たきりにならないよう共に頑張りましょう。

社協の益々の発展をお祈り申し上げます。

喜ばれた「ひとりぐらし会食会」

元副会長　籏村 治雄

高津第一地区社会福祉協議会の歩みと共に発行されてきました「社協ニュース」が、このたび記念すべき第50号の発行に至りましたことを、心からお祝い申し上げます。

これまでの高津第一地区社協の長い歴史を振り返りますと、必ずしも順風満帆ということではなかったように思います。運営に携わられた歴代の多くの諸先輩の方々のご苦労を思い起こし、改めて敬意と感謝を申し上げる次第です。

私も一時期、地区社協の役員として運営に参画していましたが、主要事業の一つである「ひとりぐらし会食会」には毎回多数の参加があり、とても喜ばれたことが印象に残っています。

食事の準備は、女性役員が中心に行い、前日には買い出しも行うわけですが、お年寄りに食べやすい食材を用い、栄養バランスを考えたメニューづくりには、いつも感心していました。

現在も永く続くこの「ひとりぐらし会食会」は、会食はもちろん、そのあとのアトラクションも皆の笑顔があふれるとても盛況な催しです。参加者からは「次回も参加できるように元気でいたい」という声も聞き、日々の生活の励みになっている、といっても過言でないと思います。

地域における人間関係の希薄化が指摘される昨今でありますが、会食会や歩こう会など地区社協の行事は、まさしく「つながり、連携、支え合い」の地域包括ケアシステムの精神に合致することだと思いますし、これらの活動を通じて地域の仲間同士の絆がより深まることを願ってやみません。

最後に、高津第一地区社会福祉協議会の益々のご発展と運営に携わる方々のご多幸を祈念いたしまして、私からのお祝いの寄稿とさせていただきます。

地域福祉活動の思い出

元理事　川邊 裕

私は保護司を委嘱され約24年になります。保護司は、保護観察所から委託によって、犯罪をおかした対象者の更生を助け、助言し、また犯罪予防活動を推進し、地域の方々や各種団体、会社等の協力を得ながら活動を続けています。

さて、私が任命された当時、暴走族、シンナー遊び、窃盗、万引き等をした青少年が対象でした。まず、家族と面接し、本人の帰住地・引受人・家族関係などの確認を行い、その後、月1～2回対象者との面接を行い、各種の報告を受けます。真面目な子もいれば約束を守らない子などそれぞれで、どんな手を差しのべたら良いのか、苦労の連続でした。しかし、辛抱強く再三連絡を取り、対象者と接するうちに少しずつ話をするようになり、心を開いて報告してくれます。全ての対象者がそのようであれば良いのですが、現状はいつも戸惑いと反省の繰り返しです。そのような中、立派に立ち直った少年もいました。後年、本人から連絡があり、現在は結婚し、子どもができ、真面目に生活している報告もあり、うれしい思い出もありました。

近年は、対象者も青少年から成人犯罪と年齢の幅が広がりました。これは、社会経済の変動にともない、犯罪も変化しています。新聞やテレビ報道にあるように、凶悪ないじめ、危険ドラッグによる薬物事件が一般化し、低年齢化が進行しています。また、高齢化により高齢者の犯罪も多発している現在です。難しい時代に少しでも犯罪が減り、犯罪をなくす町創りに向けて活動を続けたいと思います。

おわりに、昭和47年4月、川崎市は政令指定都市に昇格し、一区ごとの保護司会が誕生しました。現在、高津保護司会は赤津武雄会長のもと40名（4月現在）の会員で、毎月1回の例会を開催し、定例研修、自主研修など自己研鑽に励んでいます。皆さんのご協力宜しくお願いいたします。

人口増加が続く地域

第一地区社会福祉協議会が担当する地域は、溝口１丁目～６丁目、久地１丁目～４丁目、宇奈根の３地区です。

本紙創刊号が発行された平成 3 年と比べると世帯数で 1.84 倍人口で 1.47 倍に増加しています。

指定都市 21 大都市の統計比較より、川崎市の長所や特徴をまとめました。

①自然増加比率が 29 年連続１位　②「出生率」が 25 年連続１位　③「死亡率」が９年連続最も低い　④「婚姻率」が 39 年連続第１位　⑤「製造品出荷額等」が２年連続１位　⑥「世帯当たり教育費支出割合」が２年連続１位　⑦「人口 10 万人当たり交通事故件数死者数」が 13 年連続最も少ない。

高津第一地区社協の世帯数と人口推移

	宇奈根		久　地		溝　口	
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数
平成３	526	173	7,257	3,255	12,061	5,244
平成９	652	236	8,054	3,745	11,253	5,669
平成13	647	230	8,167	3,825	11,593	5,955
平成18	839	322	8,377	3,961	13,953	7,444
平成23	1,329	562	12,116	5,453	14,347	7,951
平成28	1,508	663	12,496	5,752	15,103	8,647

三地域の人口推移

170回を迎えた福寿草の会

健康寿命を伸ばす機会に

高津第一社会福祉協議会は、高齢者支援活動として、年5回の会食会と春と秋の「歩こう会」を「福寿草の会」として行っています。

一人ぐらし高齢者が、外出の機会を増やし、おいしい昼食と友達との会話やアトラクションを楽しんで「健康寿命を伸ばす」ことを願っています。参加者は、65歳以上で「ひとりぐらし老人を見守るカード」に登録された方で、現在約85名おられます。

おいしい食事と楽しい会話

会食会は、女性スタッフが中心となり、食事の片付け後、栄養バランスを考慮した次回レシピ、食材の調達、担当者などの計画を話し合います。日程が決まると、案内状がスタッフの手を通して会員に配布されます。スタッフは、担当する会員に見守り活動を兼ねて、参加の有無を確認します。参加者数が決まると、食材を準備し、当日は朝より調理を行い、会場の設営、受付準備、盛り付け、配膳などを行います。

スタッフも一緒にテーブルに着き、レシピの説明を聞いた後「いただきます！」の挨拶で昼食が始まります。参加者からは、「いつも料理がおいしい！」「お友達との会話やアトラクションが楽しみ！」「毎回、楽しみに待っています。」などの声。

春と秋の歩こう会

歩こう会は、福寿草の会が町会・地域の老人会・老人クラブに呼びかけ、春は津田山緑が丘霊園、秋は東高根森林公園に出かけています。坂道が苦手の方もいらっしゃいますが、助けあったり自分のペースで歩くこともできます。毎回多数の参加者がおられます。

春の歩こう会

第168回

4月1日（金）桜が満開の津田山緑が丘霊園を目指し春の歩こう会が開催された。参加者は80名。集合場所の大山街道ふるさと館から約1時間。心地よい春風で花弁が舞う公園で車座になり崎陽軒の特製弁当を楽しみました。

第169回

5月12日（木）大山街道ふるさと館で65名が参加して開催。アトラクションは高津区役所健康福祉センター管理栄養士・内藤由莉さんによる「高齢者の食生活について」のお話でした。

第170回

7月7日（木）大山街道ふるさと館で、71名が参加。受付で短冊が配られ、思い思いの願い事を書き、笹竹に飾りました。アトラクションは、メディカルセンター川崎の高橋裕文さんから「高齢者にやさしい、座って出来る健康体操」を楽しく学びました。

“ダメ。ゼッタイ。”普及運動 危険ドラッグは毒だ!

6月28日、高津区保護司会（赤津会長）は、神奈川県薬物乱用防止指導員協議会高津支部、高津少年補導員連絡会の人々と溝の口キラリデッキで危険ドラッグ、麻薬、覚せい剤の薬物乱用防止を訴える街頭キャンペーンを行いました。

「ダメ。ゼッタイ。」を合言葉にリーフレット等を行き交う人々に配布しました。

社会を明るくする運動 犯罪や非行のない安心で安全な暮らしを!

7月5日、高津区更生保護女性会は、溝の口キラリデッキで“社会を明るくする運動”の街頭キャンペーンを行い、通行人にリーフレット等を配布しました。

犯罪や非行のない安全で安心な暮らしをかなえるために、今、何が求められているのか、そして、自分には何ができるかを考えてみましょう。

高津区民祭に参加

7月31日（日）、第43回高津区民祭が大山街道を中心に開催されました。高津第一地区社協のメンバーは、福祉車両レッツ号と共に、炎天下の中で「おたっしゃ10（テン）のトライ」が書かれたウチワを沿道の市民に配りながらパレードの参加。

途中、パレードの隊列が止まった時、ふっと後ろを振り返ると多摩川の方に真っ黒な雲。「こっちに来たら大変」と話をしているとあっという間に大粒の雨。傘をさし、しばし足止め。沿道の人たちもテントの下や軒下に一時避難。しばらくすると雨もやみ、少し涼しくなった中を無事にゴール。ご参加の皆様、お疲れさまでした。

大盛況の健康福祉祭り

7月2日（土）、てくのかわさきで、第27回たかつ区健康福祉まつりが開催されました。夏の暑さの中でしたが、当日来場者が約1,100人と大盛況でした。

健康と福祉をテーマにしたこのまつりには、高津区で活動する団体を中心に、てくのかわさき館内各所にブースを設けて、団体活動の広報や啓発活動を行っています。2階のホールではオープニングセレモニーから始まり、最後に行われた抽選会まで、各時間ごとに子どものフラダンスあり、腹話術ありと各年代の方に楽しめるプログラムが予定されており、来場された方は楽しいひと時を過ごしていました。

また、被災地への息の長い支援も必要として、東日本大震災、熊本地震への被災地支援のための物品販売も行っており、売上金はそれぞれの被災地に送られるそうです。

8月18日(木)に予定していた「第18回動物ふれあい広場」は天候不順のため中止しました。

初の避難所開設訓練

6月12日（日）、西高津中学校で初の避難所開設訓練が行われました。西高津中学校体育館を避難所とするのは、久地第一町会、久地第二町会、久地東町会、溝口第六町会の四町会。

昨年3月4日、第一回避難所運営会議を開催してから7回の運営会議を重ね、避難所設営にあたって必要となる係、実行体制と責任者などを確認してきました。当日は体育館に集合し、設営レイアウトに従って、避難者の受付、名簿の作成、炊き出しの準備、非常用トイレの組み立てなど手際よく設営にあたっていました。150名の参加者には、炊き出しで用意した「わかめごはん」が配られ、「おいしい」との評判でした。

参加者の感想では、「体育館が地下なので不自由」とか「小さな子供がいるので、静かにしていられるか心配」「知っている人がたくさんいて少し安心した」などの声が聞かれ、今後の避難所設営の大きな経験になりました。

あった～！歓声あがる芋ばたけ

6月18日（土）、高津第一地区民生委員児童委員協議会主催の「親子でいもほり体験」が開催されました。当地区社協の前会長・河原さんの畑での「いもほり体験」は、今年で14回を数えることになりました。

今回、招待された西高津保育園の園児とその家族は合計95名。梅雨明け前なのに、朝から真夏のようなとても良い天気で、みんな畑に来るまでに汗ビッショリ！。

開会式では、あいさつの後、スタッフが、3月の作付からジャガイモが育ってきた様子をパネルで説明。「土の中にジャガイモさんが隠れているよ！」の呼びかけで、一斉に畑へ！

茎を引っ張ると土の中から大小さまざまな大きさのお芋がゴロゴロ。子どもたちは、「あった～！！」「大きい！」と大喜び。掘ったジャガイモはカゴに入れ、一杯になったカゴは、力持ちのお父さんたちが手際よく運んで「アッ」という間に修了。

次は、畑のかたわらにある大きな梅の木の下で、ジャガバターを「いただきま～す！」

帰り際に「うちの子、じゃがいもは苦手だったんですけど、おいしい！って、いっぱい食べてくれました！」とお母さんから喜びの声をかけて頂きました。朝早くから準備してヨカッタ！と私たちもすっかり嬉しくなった一日でした。

敬老慰問品をお届けしました！

9月1日から始まった敬老週間。今年も当協議会から「見守りカード」に登録されている「ひとりぐらしの方や寝たきりの方」85名に、敬老慰問品をお届けしました。

どうぞ、お健やかにお過ごしください。

編集後記

「温故知新」古きをたずねて新しきを知る。これこそ今号のテーマでしょう。創刊50号、1年に2回発行ですから25年の歴史を刻んだことになります。これまで社協活動にかかわってこられた方々の思いが述べられています。歴史の重みを感じつつ、新しい福祉の時代の建設へのヒントが得られればと思います。(K)

編集委員　小竹　正美、望月　正一、矢島真理子、横山　滋、若林豊茂美